
a holiday:

生糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a holiday..

【Nコード】

N7919E

【作者名】

生糸

【あらすじ】

とある休日。ケーキの箱を手に彼氏——康介の家に赴いた、みゆ。おいしくティータイムを楽しもうと考えていたみゆの思惑は微妙にずれてしまい……。短編系連載、二部完結。

S S—休日—

「ケーキ、買ってきたんだっ」

素敵に綺麗に晴天のある休日。

雲ひとつない晴天、ってゆうのは日のことを言うんだろうなあ、
なんて思いながら。

私は、彼氏——康介の自宅に赴いていた。

「幸福堂のケーキ。食べるでしょ？」

「おお、いいな。じゃあ食うか」

そう言って奥の部屋に移動した康介。

彼が用意したものは――。

「なに、コレ……」

グローブだった。

「知らないのか？　これはグローブって言ってな。

野球とかするときにボールをキャッチするもので――」

「それくらい知ってる！」

そーゆーことじゃないの！」

私たちはいつの間にか家の前の道路に出ていた。

彼の家の前は、横幅のある住宅街の中の道のひとつ。

いつも、近くにすむ子供達が遊んでいるのだが……。

今日は私たち以外は誰もいないようだ。

「美味しいものをよりうまく食いたけりゃ——」

白球をぽんぽんと宙に放りながら彼は言う。

「……………」?

「汗水たらして遊んだ後が一番だろ」

「……………」

にっこりと微笑まれ、私は返す言葉を失った。

……そんな顔されたら反論なんてできないじゃん。

そんな胸中を知ってか知らずか、彼は満足そうにひとつ頷くと。

「じゃ、始めるか！」

腕を振り回し、大きな声で言った。

＊
＊
＊
＊

至って単純なことの繰り返し。

この上なく分かりやすく、比較的シンプルなルール。

それは

『相手にボールを投げ、相手の投げるそれを捕る』。

たった、それだけ。

だけど。

「あうっ」

たったそれだけなのに。

「ひゃあ！」

それが、できない。

「……なあ、みゆ。球、避けてたら話にならない」

「……だってだって」

怖いんだもん。

だけど そんなことを言い訳にしている暇もなく。

数十分もすれば私は、ボールをしっかりキャッチできるまでになつていた。

「えへへ。ほめてほめて」

「はいはい。あとでケーキのいちご、やるからな」

笑顔でボールを投げる彼。

…何だかいつもより、輝いて見えた。

ってゆうか康介って、こんなに野球うまかったわけ？

「球投げるだけなら野球の上手さは関係ないぞ」

言いながらも彼は満足げな表情を浮かべていた。

——…だけど人間とは、至って不思議なもので。

慣れた、と思った時期が。

一番ミスをしやすいのだ。

「わっ」

笑顔もつかの間。

彼の投げた白球は、私のグローブを弾き。

背後の垣根を越えていく。

がしゅん、と派手な音があがつた。

聞いただけで明らかに何か割れた音だと分かった。

「……ど、どうしよう……」

第二部

「……やべえ。ここ、近所でも有名な雷親父の家だぞ」

参ったな、と彼は頭を掻く。

私とは言ええ。

「……あ、の………」

すでに、涙目だった。

このご時世まだ『雷親父』なんてものが存在するのか。

というのはさておき。

とんでもないことをしてしまった、ということだけは理解できる。

「……ごめ…なさっ…」

「いいって。」

「お前もそんなに泣くな」

ぽん、と頭を撫でられ、私は堪えきれなくなり小さく嗚咽を漏らした。

「でもまあ、謝りには行かなくちな」

呟いた彼の言葉を私は慌てて止める。

「わ、私がいけないんだから私が行くよっ」

だけど彼は首を縦には振らなかった。

「お前をキャッチボールに誘ったのは俺だ。

なら、俺が責任を負わずのうのうと見ている道理はないだろ」

そう言って再び、彼は私の頭に手を置いた。

「待っててくれな」

そう言ってきびすを返すと、彼は小さく一つ、深呼吸をしていた。

「……………」

私は彼の後姿を複雑な気持ちで見送っていた。

こんなときに不謹慎かも知けどなんだか。

……すごく、頼もしいと思う。

原因を作った私が何を言っているんだと思われてしまうかもしれないが。

……いつだって、彼はそうだ。

何だかんだ言いながらいつだって彼は私を助けてくれた。

——…私だってわかってる。

それに甘え続けちゃ駄目なんだってことくらい。

わかっているがらどうして今回も前に出れなかったの？

康介が止めた、というのもあるかもしれないが、そんなのは責任転嫁にすぎない。

大事なのは気持ちだろう？

だったら前に出てみる、みゆ！

「……っ………」

私は 自分自身を怒鳴り付ける。

「………私だって」

康介に迷惑ばかりかけられない。

ぐっと拳に力を込める。

——何でこんなに必死になっているのか？

そんなのは 簡単な理由だ。

私が彼のことを——…。

「——っ!？」

一步を踏み出そうとした途端に聞こえてきた大きな笑い声に、思わず身をすくませる。

どうしていいかわからず呆然と立ち尽くしていると暫くの後。

「ただいま」

彼が、戻ってきた。

「……………っっ…！」

声にならない怒りが込み上げてきた。

せっかく人が！ 一歩を出そうってときに！

……でも。

「……おかえりっ」

彼の胸めがけ思い切り飛び込んでやった。

彼は突然のことで目を白黒させていたが、やがて小さく笑うと。

「……ただいま」

そう言って 強く。

強く私を抱き締めた。

「……みゆ」

彼はゆっくりと目を閉じる。

そのとき。

ぐ〜……。

「……………」

「……………」

「…………おなかへった」

結局私は。

色気より食い気だったわけだ。

*
*
*
*

「その紙袋、なあに？」

家に戻るなり瞳をきらきらとさせて彼女が聞いてきた。

「これか？」

さっきの雷親父からいただいた茶菓子だ。

俺が正面切って謝りに行ったら

『素直に謝りにきたのはお前が初めてじゃ！』

なんて大声で笑って……。

また来い、ってんで帰り際に渡されたんだ」

なかなかユーモアのある人だったと思う。

噂、なんて正直あてにならないな。

「こんなにたくさん……。」

全部食べていいのっ!？」

「…ほどほどにな」

まあ、いくら俺らが育ち盛りだからと言っても、山ほどある茶菓
子とケーキの群れを食べ尽くすことはまず不可能だろう。

だが。

「おなかいっぱい」

「……………」

甘かった。

砂糖をたくさん振りかけたマロングラッセほどに甘かった。

あれだけあった茶菓子の山は今やその姿を消し。

ケーキの群れは見事にお腹の中に収まった。

「なんだか幸せ、だね」

「……まあ、そうだな」

ふくれた腹をさすりながら、俺たちは互いに笑い合うのだった。

………そのあと。

お袋が帰ってきて、一言。

「みゆちゃん来るって聞いたからケーキ貰って来たわよ。」

「今日中に食べちゃってね！」

—
e
n
d

あんたは鬼か。

……
いや。

第二部（後書き）

はじめまして、生糸です。

至らないところが多々、ありますが
読んでいただけるだけでも光栄です。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919e/>

a holiday:

2010年10月11日22時40分発行